



May 2026

#04

First Half

An Independent
Interview Magazine

**BUILD
UP!!**

「大きな目標に必要なのは失敗」——遠回りに見えた経験の積み重ねが、今の仕事へと繋がった山本さんのこれまで

第四回目のピックアッププレイヤーは、東京都稲城市で寝具専門店「いづみや」を営む、山本宰士さんです。音楽や料理など、さまざまな経験を経て、現在は布団職人としてお店を守る山本さん。今回は、そんな山本さんの生い立ちやこれまでの歩みについてお話を伺いました。前編・後編に分けてお届けします。

——ご出身は稲城なのでしょうか。

山本さん(以下、山本/敬称略)：いえ、生まれは青葉台です。3歳の頃、稲城長沼に越してきました。今年で僕は51歳になるので、越してきて48年目。ほぼ出身は稲城市みたいなものですね。

——稲城市で過ごして今年で48年目ということですが、昔と比べて稲城市は変わりましたか。

山本：だいぶ変わりましたね。今じゃ道路は整備され、住宅がびっしりと建っていますが、昔は道路が砂利道で、辺りは田んぼ、梨農園、そして山という完全な田舎でした。でも、この^{のどか}長閑な雰囲気とゆったり流れている時間は変わらないかもしれないですね。昔なんて家の鍵をかけずに地元の人たちが自由に家を出入りしてましたからね(笑)。あっ、あとね、僕は…この世でゴキブリよりもカエルとセミが嫌い!!

——カエルとセミ……なぜでしょう。

山本：もうね、道路のあちらこちらにカエルがたくさんいるんですよ…干からびてたりするし、夜はうるさい(笑)。今と比べてセミも昔はたくさんいて、歩いてるとくっついて来るからね。

——自然が豊かという証拠ですかね(笑)。

山本：よく言えばね(笑)。あとはね、お店を開けるとカブトムシとかも入ってきちゃうのよ。そういう時代でしたね。

——自然が広大で、地元民同士の繋がりがみたいな描写が浮かびました。

山本：良くも悪くも田舎だから、横の繋がりとかコミュニティみたいなのは当時強かったかもしれないですね。横の繋がりを中学生の頃に経験したことがあるんですよ。

——どんなエピソードでしょうか。

山本：小学4年生の頃、劇をしたことがあって。背は小さかったけど、声はよく通る方だった。ありがたいことに劇の評判も良かったんです。それでそのまま地元の中学に進学をしたんですが、教室の入り口に上級生の女子が立って、こう言ってるんですよ。「山本はどこにいる」って。「僕ですけど…」って言うたら「ちょっと来い」と言われて。職員室に連れて

いかれたら、そこが演劇部だったんです(笑)。

——まさかのスカウティングだったわけですね。

山本：男子は一人もいないし、当時はからかわれる時代で。断つても中々帰してくれないし。小学校の情報があるまま中学校に行き着いているので、横の繋がりの強さを感じますよね。

——結局演劇部はどうされたのでしょうか。

山本：友達を一人巻き込んで入部しましたよ。でも、一年で辞めました。本当は吹奏楽部に入部してサクソをしたかったんです。でも仲良かった友達が陸上部にいて、僕も足が速くなってきたタイミングだったので吹奏楽部ではなく、陸上部に入部しました。あと同時に生徒会にも携わっていましたね。

——陸上部に生徒会。かなり多忙な中学生生活ですね。

山本：そう思いますね。けど個人的にはやはり音楽、部活動で言うなら吹奏楽部でサクソを試してみたかった。卒業のタイミングで吹奏楽部の顧問に「サクソやりたかったんですよ」って打ち明けたんです。そしたら顧問は「今からじゃ遅いよ」って。数年後、顧問と再会して話したことで分かったんですが、当時の僕は勘違いをしてしまって。顧問は「卒業間近に言うなんて遅いよ」みたいなニュアンスだったらしくて。僕は純粋に、高校から始めても遅いという受け取り方をしてしまって(笑)。「管楽器が遅いならギターを始めようかな」って思って、高校入学のタイミングでギターを買ってもらい、高校一年から触れてました。

——ええ(笑)、すれ違いのコントみたいになってますね。当初サクソに夢を見て、でも色々ありギターに興味をもたれますが、なぜサクソとギターだったのでしょうか。

山本：サクソはまず音がカッコいいと思っていて。今思うと歌に近い印象があるんですよ。吹いた時の一音が刺さるといいますか。“一撃の強さ”に惹かれてました。ギターは兄の影響でロックもフォークも聴いてましたね。ほとんど洋楽ばかりだったんですけど、ギターフレーズがかっこよくて。憧れもありました。

——音楽に対する熱い気持ちが伝わってきます。高校では嗜れて吹奏楽部あるいは軽音部等に入部されたんですか。

山本：いえ、柔道部です。

——(笑)。ここまで一度も出てきてない柔道部にどうして入部されたのでしょうか。

山本：小学校からの知り合いに「柔道部に興味があ

山本 宰士さん

神奈川県横浜市出身
東京都稲城市の寝具専門店「いづみや」店主。大学卒業後、音楽の師匠のもとで付き人を務めたのち家業に従事。現在は布団の仕立てと販売を行っている。



るから一緒に見学に来てほしい」と言われて。当時の柔道部は部員数が少なく、顧問は「とにかく部員数を増やせ」と言っていたらしいんです。見学の付き添いで行っただけなのに、「見学はないから、仮入部にしておく」と言われて。気がついたら友達と一緒に柔道部に入部してました。

——柔道部での生活はどうでしたか。

山本：とにかく厳しい環境でしたね。初めてだったこともあり、過酷でありましたが辞めることだけはしなかった。結果として3年間やり遂げましたね。

——根性がすごいですね。

山本：でも人生において「柔道部で良かった」というエピソードもあって。練習も休まずに出続けた姿勢を顧問が見てくれて。夏に試合があったんですけど、その試合に出してくれたいんです。ただ、その試合で大怪我をしてしまって。精密検査をしたら怪我以外の部分で違う問題が見つかった。

——どんな問題だったのでしょうか。

山本：心臓に穴が空いていたんです。心臓って血液を循環させるポンプ的な役割があるんですけど、それが機能してなかった。新しい血と古い血が混ざっている状態で。僕は元々身体も小さいし、免疫力も高くはなかった。これは元々の生まれつきだと思ってたんですが、実は違っていて。

——色々な巡り合わせで気づけた結果ですね。それでも辞めなかったのが素晴らしいです。

山本：さすがに活動量は落としました。けど、できることは率先して活動してましたね。

——ちなみに柔道部で活動されながら、ギターに触れていたんですか。

山本：いや全然。本当に時間が空いた時に弾いたりしてたくらいで。ほとんど部活と勉強に時間を取られていました。けど、なんとかギターは独学でできるようになった。それともう一つ趣味があって、料理するのが好きなんです。

——料理ですか。きっかけはあったんですか。

山本：両親が仕事で大変なので、幼少期から自身の身の回りのことはなるべくするように心がけていました。最初は母が料理を作っている横で手伝いをしていて。見ながら覚えたんです。小学3年頃から自分でご飯を作れるようになりました。それから従兄弟が居酒屋をやって。時間があれば裏口から厨房に入れてくれたんです。それも見よう見まねで覚えましたね。

—えらいですね。山本さんのお話を聞いていると、料理にも打ち込んだ気がします。

山本： そうなんですよ。高校卒業後は石巻市にある大学に進学したんです。石巻市は港町で、新鮮な魚が多い。自炊をちゃんとしていたのもあり、料理にも興味が湧いてきて。知人から「魚の捌き方マニュアル」をもらって、それを読みながら覚えた結果、捌けるようになりました。

—今でも料理はされるんですか。

山本： 毎日作ってますよ。大体1時間あれば一通り全て作れます。息子がいるんですけど、しょっちゅうリクエストされる(笑)。だから時間をかけて作ってあげたいと思いますね。

—ちなみに何をリクエストされることが多いですか。

山本： 息子はナマコやグラタンで、奥さんからは角煮大根かな。

—ナマコ…食べたことないです。

山本： すごく美味しいんですよ。僕のおすすめは生ナマコをスライスして、軽く洗うでしょ？ 味付けは三杯酢の代わりに「青じそドレッシング」。息子なんかはもう抱えて食べるくらい好きで。息子が小学生の頃、夏に「ナマコ食べたい」って言うわけ。ナマコは冬だから、「笑われるぞ」って(笑)。

—なんだかほっこりするやりとりですね。ナマコの刺身、食べてみたくなりました。

山本： あと僕は奥さんが大学生の時に出会ってるんですけど。当時ナマコの刺身を振る舞ったことがあったんです。最初は「ええ、ナマコ…」みたいな反応だったんですけど、食べてみたらやはり美味しかったらしくて。その後、奥さんが友達同士で食材を持ち合っでみんなで食べようみたいな集まりがあったんですよ。その時、奥さんはナマコを抱えて持っていきましたからね。

—誰かを動かすくらい料理の腕があるという証拠でもありますよね。

山本： 学生の頃していたアルバイトは全て飲食でしたからね。最終的に調理師免許も取得しました。

—調理師免許、取得されているんですね。納得です。

山本： 興味があると追求したくなるし、何より好きなことで過ごせる時間は幸せですからね。

—ちなみに音楽活動はどうなったのでしょうか。

山本： 大学に進学して、サークルに最初入ろうと思ったんです。けど、大学は当時できてまだ5年くらいだった。交流も少なければ、本格的に環境も整っていない。じゃあ自分で作ってしまおうと思って。学校側と相談しながら、大学2年生の頃に音楽サークルを立ち上げました。

—すごい行動力ですね。その後はどうなったのでしょうか。

山本： 音楽のことをもっと学びたいと思って、大学卒業後に音楽の専門学校に2年通いました。そのタイミングで音楽の師匠にも出会うことができました。

—師匠との出会いについて教えてください。

山本： 元々いところ居酒屋をやっていたんですけど、実は有名人もお忍びで来たりとか。その居酒屋は吉祥寺の「曼荼羅(MANDALA)」っていうライブハウスで年に一回ライブをやって。基本的にはミュージシャンの方々が演奏をして楽しむ内容なんですけど、実際にお客さんが歌ったり弾いたりするコーナーがあって、「出てみる？」って言われたんです。

—実際に出演はされたのでしょうか。

山本： しましたよ。エレキギター弾いて、歌って。緊張もしたから上手くできたかわからないけど、貴重な体験をさせてもらったなって。

—その後、師匠とはどういった展開を経て、関係性が構築されるのでしょうか。

山本： その後も居酒屋にはよく行っていたんです。入口とかに師匠のポスターが貼ってあって、名だたるプロの方々と演奏しているのがわかるわけですよ。師匠は知人ぞ知るプロのスタジオミュージシャンだった。僕は「すげー」って純粋に感じて。そして師匠が居酒屋にちょうど来て。

—面白い巡り合わせの予感があります。

山本： 挨拶してお話をさせてもらって。そしたら師匠が「よかったら手伝うか？」って言ってくれたんです。一般的にローディーと言われるポジションで、楽器や機材の運搬などライブのために必要な準備をメインで行う仕事内容です。「ぜひお願いします」って話をして、電話番号だけ教えてもらったんです。それが5月頃の出来事で、手伝いに参加するのは9月だったんです。そしたら6月頃に師匠から電話がかかってきて。

—なんていう電話だったんですか。

山本： 「ぎっくり腰になってしまったから手伝えないか」という電話で。レコーディングの予定もあるから、運転や機材を運ぶ必要もある。僕からしたらすごく嬉しくて。「手伝わさせていただきます」とお返事して、実際に運転をして機材を運んで、色んなスタジオや現場に行かせてもらえた。中々できない経験ですよ。それから少し経って師匠が僕にギャラをくれようとしたんです。「ここだ！」って思ったんです。

—というところ。

山本： 「ギャラはいらないので、またこうしたお手伝いをさせてくれませんか」とお願いをしたんです。そしたら師匠は最初悩んでたんですけど、最後は僕にもう一度「いいのか？」と確認してくれて、本格的に付き人としての関係性が始まりました。

—ノーギャラということは、貯金を切り崩して生活されたんですか。

山本： 交通費だけもらってましたけど、基本は貯金を切り崩して生活をしてました。お金では買えない貴重な経験をさせてもらっているとすごく感じてましたからね。師匠も厳しい方でしたけど、なんとか踏ん張って食らいついて。3年間付き人をさせてもらって、4年目で辞めたんです。

—辞めた理由はなんだったのでしょうか。

山本： これは完全に僕個人の性格なんですけど、誰かを押しつけて前に行こうという気持ちがないんです。どちらかというと、プロを目指すというよりも、色んな人と演奏したり誰かに教えることが好きだった。段々と過ごすうちに本来目指していたものとのギャップを感じてきて、このままだと本末転倒になるなって。けど、あらゆるプロミュージシャン、数多くの現場に行かせてもらえたのは財産ですよ。それから師匠は厳しい人だったけど、もちろん優しさもある方だった。師匠に鍛えられた3年間は本当にかげがえのない時間で、今こうして仕事をできているのもあの頃の経験があったからこそだと思っています。

—その後はどうされたんですか。

山本： 料理の道に進むのも考えてましたね。付き人を辞めたのが26歳の頃。奥さんと付き合っていたタイミングで、年齢的にも結婚を考え始めるじゃないですか。けど、さっきも言った通り、誰かを押しつけることが苦手だった。例えば料理を作って振る舞うじゃないですか。食べてくれた人たちに「美味しい！」って満足してもらえたら、僕はそれだけで幸せになってしまう。つまり、お金をもらうという考えがどうしても出来なかった。

—山本さんの優しさがわかるエピソードでもありますね。

山本： 自分の利益だけを追求する考え方は絶対に来ないし、したくもない。きっとこの気持ちが本心なんだと気づいた時に、「好きを仕事にはいけない」と気がついたんです。ギターも料理も教えたり共有する時間は好きだけど、それだけでいい。だから、それ以降2年間はアルバイトをして過ごしてました。当時は実家の仕事を継ぐ気持ちもなかったです。(※後編で理由がわかります)

—せっかくなので奥様との馴れ初めも聞けたりできますか。

山本： 僕がちょうどギターで手伝ったグループのファンだったんですよ(笑)。グループのメンバーと「可愛い子いるね」みたいなたわいのない話を最初はして。ちょうどPCメールが普及し始めた頃で、メンバーとファンがやりとりできたんです。そしたら毎晩きちんと返信をくれる。音楽からプライベートまで話すうちに楽しくなって、一度会ってみよう。それが例の「可愛い子」だった。そこから付き合いが始まりました。

—山本さんから見てどういった印象だったんですか。

山本： 僕と全く性格も違うんですよ。でもそれが案外居心地の良さとかに繋がったりしますよね。それから裏表のない明るいところが素敵。僕は音楽の付き人をしたり、料理をしたり、布団屋での出来事があったりと、中々時間を作ることが出来なかったし、結婚も僕のせいで遠のいてしまうと思って。むしろ当時の僕は、結婚を考えられるほど余裕なかった。それでも奥さんは別れる選択をせずに、側で支えてくれたから今があるんだと改めて感じますね。(※布団屋での出来事、山本さんの当時の様子)

(は後編で明らかになります)

——葛藤された様子が伝わってきます。その後はどのような展開になるのでしょうか

山本：当時僕はもう音楽から離れてたんですよ。そしたら知り合いから電話がかかってきて。「ギターの子が辞めてしまったから手伝ってよ」って。「全然ギター触れてないし、今はもう思うように弾けないかもしれないよ」って言ったけど、「大丈夫だから」って言われて手伝うことにしたんです。当時、軽井沢の町おこしで開催されていた「ラブソングアワード」っていうコンテストがあって。「山本さんがOKなら出たいんだけど」って言うわけですよ(笑)。仕方ないから出るかって思って参加したら、準優勝で。

——急造なのに準優勝、すごいですね。その後も気になります。

山本：その翌年か翌々年だったかな…軽井沢にあるプリンスホテルがスキー場開きをします。その会場でラブソングアワードで優勝したバンドが演奏する予定だったんですよ。そしたら、優勝したバンドが喧嘩別れで解散して。それで準優勝した僕らに順番が回ってきたと(笑)。

——もちろん参加されたんですよね？

山本：開催日を聞いたら、奥さんの誕生日と同じ日だったんです。実はその日にプロポーズをしようと思って…(笑)。だからバンドメンバーに「申し訳ないんだけど、その日彼女にプロポーズする予定だから行けない」って断ったんですよ。そしたら「マ

ネージャー枠と一緒に連れて来ちゃいなよ」って。

——結局、連れて一緒に行かれたんですか。

山本：行きました(笑)。ライブの前日に奥さんと前乗りして、ホテルでプロポーズしました。当日、軽井沢の地方ラジオ局とかも来てて、かなり人数も多く会場は盛り上がってましたね。確か3,000人くらい集まって。その時にインタビューみたいな時間があって、「昨日彼女にプロポーズしたんです」って。そしたら会場の方々が祝福してくれて。

——真似しようとしても出来ない、素敵な1日ですね。

山本：そうですね。色々な状況が重なって生まれた1日だったので、思い出です。

——ここまで山本さんのプライベートについてたくさんお話を聞かせていただきました。山本さんご自身が伝えたい人生のメッセージはありますか。

山本：僕は実際に小学校や老人ホームで演奏させてもらうことがあるんですけど、特に思うのは子供達についてですね。子供達には成功例も作って欲しいけど、失敗例も作って欲しいと思っています。今の世の中って失敗させないことばかり考えている気がするんです。けど、大きな目標や夢を叶えるために一番必要なのは失敗だと思っています。その経験がより成功へのヒントになる。先生や親が「この子は不器用だからできないんですよ」って言うシーンをよく見るんです。子供達の未来や可能性を潰してしまっているのは、実は一番身近な人だったりする。例えば、楽器の練習とかでよくあるのは、少し習っただけで

出来てしまう子がいると。僕なんかはバツと覚えて、ささっとこなしてしまうタイプだった。ただそういうタイプって意外と、のめり込まないんですよ。練習しなかったりとかね。でも、練習しても出来なくて「なにくそ」って思う子ほど、のめり込んで段々と味が出てくる。そういうトライアンドエラーを繰り返して自分自身と向き合う子が、プロになって人々を突き動かす音を奏するんだと思う。勉強でもスポーツでも音楽でも、なんでもそう。諦めずにコツコツ好きなことを成し遂げれば必ず叶うと思っています。だからこそ、子供達の可能性を親や先生たちが決めつけるのではなく、少しでも子供達が過ごしやすい環境を作ってあげて欲しいと思っています。

今回は、山本さんの学生時代や、家業を継ぐ前のことを中心にお話を伺いました。現在の仕事に至るまでの背景や想いは、次号・後編でご紹介します。

Shop Info

寝具専門店「いづみや」

代表の山本さんは、寝具製作技能士1級の資格を持つ布団職人。稲城市唯一の寝具専門店として、布団の仕立てから打ち直しまで一貫して行っています。寝具のことなら、ぜひ一度相談してみてください。

〒206-0801 東京都稲城市大丸125-3
南武線 稲城長沼駅 徒歩1分
電話番号：042-377-7546
営業時間：10:00-19:00
定休日：日曜・祝日

BUILD UP!! #04 First Half

Published by Additional Time, LLC
May 2026
<https://additionaltime.jp>

本誌「BUILD UP!!」は、あらゆる業種で活躍する人たちが、何を土台とし、どのように今の自分を築き上げ、未来につなげるのかを尋ねるインタビュー媒体です。

Shop Info

〒206-0802 東京都稲城市東長沼516-2
ShareDepartment R-3
JR 南武線 稲城長沼駅 徒歩1分
営業時間：13:00 ~ 19:00
定休日：火曜・水曜

Online Store

Additional Time Store
<https://additionaltime.net>

